

## 主題「ふわふわドッジボール」

### 1 実践の特徴

#### (1) 実生活にある身近な場面を取り上げて考えさせる実践

今までの活動で学んできた、友達をいい気持ちにさせる「ふわふわことば」、嫌な気持ちにさせる「ちくちくことば」を、ドッジボールという日常的な場面を取り上げて考えさせることで、生活に生かす実践力を身に付けさせることをねらいとした実践である。

#### (2) 課題の焦点化

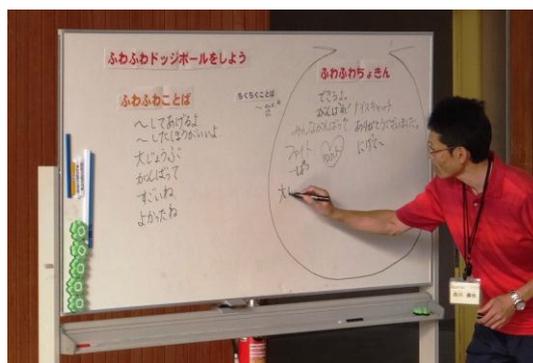
児童がドッジボールに熱中し、課題を忘れてしまうことがないように、ゲーム後の振り返りではなく、児童からふわふわ言葉が聞こえてきた都度、ゲームを止めて確認することで課題の焦点化を図った。

### 2 実践の様子

#### (1) つかむ段階

初めに準備運動と、研究授業の緊張感をほぐすためのじゃんけんを使ったペア運動を行ったあと、ふわふわ言葉とちくちく言葉を確認した。ちくちく言葉の例を児童に発言させるときに、授業者が「きつと言いたくないと思うけれど」「先生も聞きたくないけれど」など声をかけることで、ちくちく言葉はよくないという雰囲気を作っていた。

また、ふわふわドッジボールの説明の際、ふわふわ言葉を貯めていく「ふわふわちょきん」を図示したことが、ふわふわ言葉を使おうとする児童の意欲向上に効果的であった。



ふわふわちょきん

#### (2) 考える段階

男女が別々にドッジボールを行い、お互いにゲームの中で聞こえてきたふわふわ言葉を探す活動を行った。ドッジボールそのものへ意識が集中してしまわないよう、授業者が児童の声やつぶやきを拾い上げ、その都度ゲームを止めて、言葉と声をかけられた児



活動の様子（ゲーム中に児童の言葉や気持ちを確認する）

童の気持ちを確認していった。そのため、ふわふわ言葉を使うという課題が焦点化され、児童はどんなふわふわ言葉を使うかを考えながら、ゲームを行うことができていた。

最後には男女混合でのゲームを行ったが、勝敗にこだわったり、ちくちく言葉を使ったりする児童は見られなかった。また、ふわふわ言葉だけでなく、外野を決める時やボールを投げる時に譲り合う場面も見られ、温かい雰囲気の中での活動となった。

### (3) ふりかえる段階

ふわふわ言葉をかけられた時のきもちを考える場面では、多くの児童から「いい気持ち」「うれしい」「たのしい」などの感想が聞かれ、ふわふわ言葉のよさを共有することができていた。また、「他の時にもこういうふうに行けるといい」と意見も出され、授業者が「どんな時」と聞き返すと、「他の遊びをするとき」「勉強するとき」などの声が返ってきた。ふわふわ言葉を掛け合うことで生まれる心地よさを実感したことで、今日の授業だけでなく、日常生活の中でふわふわ言葉を使っていこうとする認識の高まりが見られた。



活動後の振り返り

## 3 参観者の声

- ドッジボールをしながらも、常に目標を意識させていたので、勝負にこだわらず、言葉を上手につかおうとする子どもの姿勢が見られてよかった。
- 授業者の言葉がけが常に温かく、正に主題に合った指導の様子であった。
- 2年生という時期に「ふわふわことば・ちくちくことば」について意識させることは大変有効だと思った。素直な心に自然と入っていった感じで、どの子も幸せそうな顔をしていた。
- 授業者の受容的な態度や言葉が何でも言える雰囲気を作っていて、児童が自信をもって発言することができていた。
- 授業者の適切な聞き返しがあり、子ども達の多様な意見を引き出すことができていた。

## 4 今後の課題

本時の授業により、児童はふわふわ言葉を使うことのよさを実感することができた。日常生活においても意識化できるようなきっかけにもなったが、この意識を今後の授業や活動にどうつなげて、そして高めていくかが課題となる。単発的な活動にならず継続的に取り組めるよう、本時の授業を核とした諸活動とのつながり（構造化）ができることさらによいと思われる。